

令和七年十一月号

《第百五十五号》

しろへび

宗教法人岩國白蛇神社

〒740-0017

今津町六丁目4-2

☎ 30-3333

霜月の祭典・行事案内



【月次祭】 九時半

八日（土）

二十日（木）

【明治祭】 九時半

三日（月）

【新嘗祭】 九時半

二十三日（日）

【昭和天皇御製】（第一二四代）

「関門国道トンネルを見て」

人の才を集めて成りし水底の道に
この世はいやさかゆかむ

「下関の宿にて」

見てあれば色とりどりの美しき花火ぞ
開く海の夜空に

「赤間神宮並びに安徳天皇陵に詣でて」
水底に沈み給ひし遠つ祖を悲しと
ぞ思ふ書見るたびに

（昭和三十三年）

【マウス供養祭・岩国白蛇保存会創立七十年記念奉告祭】

十月四日

第二十九回マウス供養祭がしろへび会館において行われました。子供飼育員十二名の他保存会会長、岩国市教育委員会、保存会飼育員等の参列を得て、岩国しろへびの命の糧である二十日鼠を懇ろに供養するためです。国の天然記念物である「岩国白蛇」が減少の傾向にある中、安定した「命の糧」の確保が最重要です。子供飼育員と共に感謝のまことを捧げた次第です。



同日の午後二時から保存会設立七十年記念奉告祭が斎行されました。祝詞には昭和三十年初代会長島地司氏、二代目森橋新一氏、三代目森橋律夫氏、そして現在

森橋宏之会長の名が読み上げられました。戦後しばらくは白蛇の減少といふ課題に地元の有志が一丸となり保護活動に尽力したこと。そのことが江戸期からの白蛇に関はる信仰が今日まで連綿と続き、今の白蛇神社の繁栄につながつてゐます。七十年の歴史の重みを感じた奉告祭となりました。

【推薦図書】

『大統領に告ぐ』

硫黄島からルーズベルトに与ふる書

産経新聞出版

一八七〇円

門田隆将 著

令和七年、すなわち二〇二五年は、先の大戦が終わって八十年周年である。二十一世紀に生きる現代日本人にとって、それが歴史の彼方の出来事になったことは、論を俟たない。「八十年」という歳月は、それほど重い。しかし、今もなお、世界で六千万人ともいわれる人々が命を落としたこの戦争には、映画やドキュメンタリー、あるいは小説やノンフィクション作品などが、途絶えることがない。私自身も、文庫や対談まで合わせると戦争にかかわる作品をこれまで三十作以上、出している。二年前には、尖閣戦時遭難事件を扱ったノンフィクション『尖閣1945』を発刊し、おかげさまで大いに反響を呼ぶことができた。しかし、私には、これだけではどうしても残しておかなければならない「史実」がまだあった。それは、熾烈な戦闘をくり返した日米両軍の中で絶対に「この物語だけは後世にひきつがなければならぬ」と思うものである。そこには、現代に生きる私たちへの教訓と、奥深い教養と、そして、ただ頭を垂れるしかない勇気が、鏝められている。日米両国で気の遠くなるような星霜に耐え、今も光を放ちつづける一通の「手紙」のことである。（はじめにより）



本居宣長の

『直毘霊』を読む(七)

物の理り、あるべき術、万づの教えごとをしも、何の道くれの道といふことは、異し国のさだなり。

異し国は、天照大御神の御国にあらざるが故に、定まれる主なくして、狭蠅なす神所を得て、荒ぶるによりて、人心あしく、慣はし乱りがはしくして、国をし取りつれば、賤しき奴も、忽ちに君ともなれば、上とある人は、下なる人に奪はれじと構へ、下なるは、上の隙を窺ひて、奪はむと謀りて、互に仇みつ、古より国治まりがたくなもありける。

【現代語訳】

物の道理、また当然あつて良い手段、全ての教育を何々の道、これこれの道といふの

は、外国の概念である。

外国は、天照大神の御国ではないので、決まつてゐる主人がいなくて、夏の蠅のやうな群がり騒ぐ神が得意ぶつて荒々しく振る舞ふことによつて、人心が悪く、風習が乱雑で、国をも奪ひ取つてしまふと、身分が低い臣下も直ちに主君ともなるので、上である人は下である人に奪はれないやうにしようといふ態度をとり、下である人は上の人のチャンスをつうかがつて奪王と企んで、互ひに敵視を繰り返して、昔から国が治まりにくかつたのである。

本居宣長と「古今和歌集」(六)

わが国最初の勅撰和歌集である「古今和歌集」は醍醐天皇の勅命により、延喜五年(九〇五)に紀貫之・紀伴則・凡河内躬恒・壬生忠峯の四人の選者により編纂されました。この平安時代初期に編まれた和歌集は国風文化の先駆けとなりました。それまでの奈良時代は遣唐使が象徴するやうに、大唐の大陸文化に大きな影響を受けた時代でした。和歌よりも「凌雲集」「文華秀麗集」「経国集」の



漢詩集が持て囃されまし。いはゆる大陸由来(唐)の価値観が最新とされたの

でした。貫之は「やまと歌は、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける」の仮名序に述べ、そして、「この歌、天地ひら

け初まりける時より出でにけり」と書き、和歌こそが漢詩に代わる価値基準であり、仮名文字こそ「ことば」だと言ひきりました。遣唐使が廃止されたのは寛平六年(八九四)であり、唐が滅びたのは「古今和歌集」勅命のわづか二年後であつたのです。

宣長が何故に「古今和歌集」を重要視したのかの一端がうかがひ知れます。

【日供祭の紹介】

神社では毎朝九時前後に、御祭神に米・酒・塩・水をお供へします。(献饌)

そして、「大祓詞」と日供祭祝詞を奏上します。最後に明治天皇又は昭和天皇の御製を奉唱します。

原則神職奉仕のみの祭典ですが、事前にお申し出れば参列も可能です。献饌の準備等を入れておよそ二十分程度の祭典です。

【月次祭の紹介】

当神社では月に二回巳の日に月次祭をしてをります。九時半からで一般の方々も自由に参列できます。月末又は月初めに小札を授与してゐます。財布等に納めてもらふ小さな御札です。また、祭典後には御神酒拝戴と撤饌(錦帯煎餅・お供米と清め塩)を授与してゐます。また、不定期ですが、お供へした御神酒を料理酒として参列者対象にくじ引きで授与してゐます。特に己巳(つちのとみ)にあたる月次祭には多くの参列があります。

